

<p>第1回 (2013.10.7)</p>	<p>『大学図書館の機能と研究活動』 引原隆士教授(工学研究科・図書館機構長)</p>
<p>第1回：講義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 場 所：学術情報メディアセンター南館 203 ・ 出席者：41名 補助6名 ・ 配布物：PPT 講義資料(A4 両面3枚)、授業スケジュール・講義構成(A4 両面1枚)、演習補助者紹介資料(A4 片面1枚)、アンケート(A4 片面1枚) <p>***** 講義内容 *****</p> <p style="text-align: center;">「学習・研究と図書館 —学術情報との付き合い方とお作法—」</p> <p>はじめに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業概要：図書館機構 HP にある「学術情報リテラシー入門」のページを参照。 ・ 履修要件：教育用コンピュータシステムの ECS-ID を取得していること。 ・ 参 考 書：『大学生と情報の活用』はオンラインで PDF で閲覧可能。 ・ オープンコースウェア：過去の資料(以前の授業名は「情報探索入門」)が掲載されている。 ・ 講義内容を Web 上で見ることができるときがあり、基本的なことは確認できる。しかし、講義はその場で話される生きた言葉なので、それ以上のものを得るなら対面が重要である。 ・ 図書は紙媒体でない電子媒体も多く、様々な情報について知っていることが必須である。 <p>図書館のイメージ (古の姿)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「書庫、貴重図書、奇書、経験豊富な司書」「静寂、カビ臭い、怖い司書(図書館職員)」といった古いイメージから図書館は変わってきている。 <p>精神的な表現としての二宮金次郎</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校の図書館近辺に設置された二宮尊徳像。どのような人物か Web で調べる＝自分で考えることを放棄し、誰かが考えた記録を自分のものにしようとしている。それで良いのかがこの授業全体の話であり、そうするならどうすべきかが本講義の話である。 <p>図書館の位置づけ (一つの解釈)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館は、書籍を解釈することによって情報を伝達し継承していく場所。 ・ 欧米における学問は宗教を中心としており、宗教を伝える神学校が図書館・大学のもと。 ・ 日本は各藩の藩史編纂所が伝承。資料をまとめることが後世に財産を残すことになる。 ・ 神学校は「なぜ」を問う場として存在したが日本はそうではなかった。民間では寺子屋等で勉強が行われたが、現在の勉強の主体である寺子屋方式に「考える」ことがどれほど入っているか。大学はもの知りではなく、ものを考える人を作らなければならないが、書かれたものを覚える小中高の学習を踏襲すると寺子屋もどきで終わり、その先には進まない。 <p>世界の図書館・日本の公共図書館・図書館の建築美</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館はイメージとして利用者に「読みたい」「触りたい」を提供する場。 ・ ヨーロッパでは、集めた資料をどう提示していくかを考え図書館を作る。 例:ストックホルム市立図書館(多数の図書に圧倒され、行くだけで読みたくなる雰囲気) ・ 知的なものに、どこでどう触れるかを重視しているため、魅せる建築を作っている。利用者が図書館に入り本に手が触れれば、デザインとして成功である。 ・ 日本の公共図書館では武雄市図書館。 ・ 他の図書館を知って、京大の図書館がどうなるべきかを皆さんは提案すべきであり、そのために図書館の使い方・資料がどうあるべきかを知る必要がある。京大の図書館に無い機能が何であるか、疑問を持って考えていくべきである。 <p>質問1 貴方にとって図書館とはどういう場ですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自学自習の場、暇つぶし、読書、会話、睡眠など。 ・ これ以外に何の場なのか？この授業の他の講義で、異なる機能を見ていくことができる。 <p>大学図書館の今:ラーニングコモンズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学図書館は、ラーニングコモンズなど、勉強をサポートする場として機能。ラーニングコモンズは世界的な流れだが、日本では中高で勉強スペースを確保する風潮があり、それに応じて大学図書館も勉強をサポートする場として図書館や学習室が利用される。 ・ 大学4年間で、近代社会において大学が始まって以降、数百年の蓄積を理解しその先に一 	

人で進むことはできない。どのようにして必要な知識を得、新しい学問を作っていくかが重要であり、対話の中の自学自習の場として図書館を利用するのが、現在の傾向である。

質問2 皆さんは使う情報の真贋をどうやって決定しますか？

- ・ Wikipedia に載っている、人と意見が一致した、調べた資料の大半が正しいと書いている、先輩が単位を取った、先生が講義で述べた、自分は正しい！など。
- ・ 何が正しいかをきちんと教え、どのように調べるかを習わなければならない。
- ・ 皆が同じ資料で同じ理論をすると皆が間違ふ。他と照らし合わせ、客観的視点や原点をどう作り上げるかが重要。それができれば研究が可能であるし他の人の間違いも指摘できる。

京都大学図書館機構

- ・ 電子図書館や書籍の図書館、学習の場、貴重資料画像などがある。国宝『國女歌舞伎絵詞』など、客観的な評価で残ったものが残る。残す作業やツール、システムの構築が重要。
- ・ 最近では山中先生のノーベル賞関連資料が KURENAI で公開され Web で見ることができる。

蔵書と図書館

- ・ 以前流行した Audio Books は淘汰され、従来「あっちに行ったりこっちに行ったり」のイメージだった図書館は、今や端末で資料の所在を調べればピンポイントで行って借りられる。
- ・ しかしそれでは無駄がなさすぎる。研究や学習には、間違つて違う本を手にとるといった間違いが重要。その分野のみを研究すると幅が狭く、踏み込みすぎて応用が利かなくなる。目に触れることが重要だが、ピンポイントにアクセスすることで逍遙が失われている。
- ・ しかし空間的な問題があるため、図書館は遠隔キャンパスから図書を運ぶサービスがある。

質問3 みなさんの学術情報利用のスキルは？

- ・ プロ級である、人に指導できる、ネットで駆使できる、勉学に困らない、必要ない、あまり使わない、ほとんど利用しない、など。
- ・ 出来上がったシステムを使う時、マニュアルを読むよりもトライ&エラーをする方が早い。
- ・ 自分のスキルを良く見て、できていること/できていないことをよく考えなければならない。
- ・ システム構築側は「あまり・ほとんど使わない」といった人をよく考えなければならない。

図書館の資料

- ・ 図書館は様々な資料を提供するだけでなく、どのように資料を利用し、どのように学習や研究に有効利用していけるかをサポートしている。
- ・ 留学先のライブラリアンに入手してもらった資料を論文に引用することで、他の研究者の勉強のプラスになったように、無視されてきた資料にチャンスを与え道を開くのは図書館員のスキル・サービス・学問への貢献であり、図書館員のこうした能力を利用すると良い。
- ・ 「資料は世界中から取り寄せることができます！図書館がお手伝いします。」

1980年代までの研究情報収集手段

- ・ 1980年代までは、郵便による別刷依頼など時間の流れや研究のペースがゆっくりしていた。
- ・ 今はメールを送ればすぐに返答があり、ペースが速く、悠長に文献検索してられない。
- ・ スキルを身につけ、速いペースの中で最も有効な方法をどう手に入れるかが重要である。

図書館と研究活動(特定分野に残存)

- ・ 現象を文献で調べ客観性を与えるという基本的な方法を短時間で行わなければならない。
- ・ 学問が成立しており証明や論理が成立している部分の外側に、どんな学問を作るかが重要。
- ・ 間違つて別の本を見るなど、間違いは重要であるが、今は昔のようにそうする余裕がない。

研究への道

- ・ 新しい分野に入るのに、どれだけ時間が稼げるかを考えるべきである。
- ・ 自力でどこまで辿り着くことができたか、その距離を資料の中で見ていくかが重要である。

電子的資料(Web Access)

- ・ KULINE から eBook、電子ジャーナル、データベース、貴重資料、リポジトリなど利用可。
- ・ e-learning : OCW, edX, courser. 他の講義を見ることで京大の講義を客観的に捉えられる。

論文の読み方

- ・ 結論をまず読む。また、理系であれば図とキャプションを見てストーリーを推測し、必要なことの本質がどこにあるかを見極めるため、イントロダクションではなく本文から読む。
- ・ キーワード検索でヒットする論文はたくさんあるが、間違つたものがヒットした時に、楽

しむ余裕が必要であり、違う分野の知識が広がることが重要である。

図書館と電子的資料の関係

- ・ 教会や図書館が検証のために資料を集めていたが、現在はそれが Web 上で行われている。資料の中でどれが正しいか考えながら本当に必要なものを残すには、不要なものも挙げなければならない。現在は、一般概念が形成できないまま、過渡的に様々な出版物が存在。

今の研究の傾向

- ・ 前例に+ α を加える研究が正しいと思われることが多いが、世の中はそれでは変わらない。

研究と電子的資料

- ・ 電子資料にはメリットとデメリットがあり、文献情報の恒久性が問われている。

資料の電子化に伴う課題

- ・ 電子化によって情報の携帯性や二次配布の容易性といった良い側面もあるが、出版業界や流通の崩壊という側面もある。新しい出版は紙ではない形態になる可能性があり、現在は過渡期。出版業が絡まないと評価する人がいなくなり、情報の正しさやオリジナリティが分からない中で研究しなければならなくなる。利便性の追及によって自分が苦勞する。

Wikipedia に対する認識(否定するものではない)

- ・ そもそも絶対的解釈は無いため、皆で作りに上げる事は重要だが Wikipedia は権威にならない。
- ・ 皆が書くから権威にならないのではなく、書く過程でフィルタリングされる辞書と異なり、Wikipedia は何が正しくて何が間違っているのか全体が見えず、限界が示されていないため。

Open Source (ソースの公開)

- ・ ソフトの真贋はトラブルの有無で即座に分かるが、知識の真贋は即座にとはいかない。

Open Access (公共知の共有)

- ・ 例えば税金等の経費を投入した研究はパブリックアクセスにするなど、学術情報をインターネットを通じて誰もが無料で閲覧可能な状態に置くこと。
- ・ 日本の学位論文も4月以降電子公開が義務化され、OATD に日本の学位論文も登録されている。大学が学位を保証しており Wikipedia とは異なる。学会の論文も同様である。

arXiv その他の論文公開

- ・ 物理系でも同様に論文が保存・公開されているサイトがあるが、例えばポアンカレ予想の解決に関する論文は Web に公開され、全員の目に晒されて真贋をチェックされた。
- ・ Wikipedia に近いが、真贋を問うために公開する点で異なり、情報をどう選ぶかが難しい。

辞書；データベース；ビッグデータ

- ・ 時間をかけて資料を集め修正しながら構築する辞書に対し、短時間で多数の人からデータを集めるのが Wikipedia。多くのデータベース、ビッグデータを集めることで何とかできるのではないかというのが、Google であり Wikipedia であり現在のネット社会である。

研究・開発の本質的作業

- ・ 桑原道義名誉教授「ほかの人がみんな前を向いて走っていたら、自分は違う方向に走りなさい。みんながその方向に道があることに気が付いたとき、あなたはすでにほかの人より進んでいる。」「みんながついてきたら 90 度曲がりなさい。」

どうやって真贋を決めるか？

- ・ 間違っただまの論文を掲載するなど、論文誌の権威が失落している。
- ・ そうしたことを調べる能力が必要であり、今後の講義で情報検索の考え方を学習する。

その他連絡事項

- ・ アンケート記入と提出のお願い。
- ・ 授業用ページと Twitter (@ku_tansaku) についてアナウンス。
- ・ 回ごとに教室が変わるため要注意。
- ・ 演習までに ECD-ID を取得し、自分の ID・PW と覚えておくこと。
- ・ 期限内に履修登録を行うこと。(記録：梶谷 春佳)